ジャイナ教と仏教④

ジャイナ教はどのように伝承されたのか？

——聖典の伝承と結集

堀田和義

約二千五百年前に誕生したジャイナ教は、仏教とは異なり、インドにおいて今日まで伝統が途切れることがなく、わずかではあるがインド国外にも広がりを見せている。これほどの長きにわたって、ジャイナ教はどのように伝承されてきたのだろうか。今回は、開祖マハーヴィーラ以降の聖典の伝承に焦点を当てて見ていきたい。

十一人のガナダラとジナの説法

ジャイナ教の事実上の開祖マハーヴィーラには、「ガナダラ（教団を支える者）」と呼ばれる十一人の高弟がいた。彼らは全員がバラモン階級の出身で、新しくジャイナ教に改宗した者たちだった。また、年齢は五人が五十代、四人が四十代、残りの二人は十六歳で、全員が同じ日に改宗し、その日からマハーヴィーラの説く裸形を実践したと言われる。

ジャイナ教の伝承では、ジナであるマハーヴィーラが「神聖な音声」を発すると、その音から意味が顕現し、ガナダラたちがそれを翻訳することで聖典が成立したという。ジャイナ教の二大宗派のうち、白衣派では、その音声は人間の言語であるけれども、他の言語を話す者や動物にも通じたために神聖だと考える。一方、空衣派では聖音「オーム」のように一音から成り、ガナダラだけがそれを理解できたと考える。これは仏教で言うところの「一音説法」、すなわち、仏や菩薩が一音によって説法をすることとよく似ている。また仏教の文献でも、他の言語を話す者にも通じると述べるものが見られる。

ガナダラたちは、十一人中九人までがマハーヴィーラ在世中、もしくは入滅の日にこの世を去ったため、開祖亡き後には、ガウタマ・インドラブーティとスダルマンの二人だけが残された。そして、ガウタマ・インドラブーティが一切知を獲得した後は、スダルマン、ジャンブーの順で教団を指導した。

現在まで伝わっているジャイナ教の白衣派聖典は「長老よ！私はかの尊者が次のように説いたのを聞きました」というフレーズで始まるものが多い。このように「尊者（＝マハーヴィーラ）

から説法を聞いた私（＝スダルマン）が、その説法の内容を跡を継ぐ長老（＝ジャンブー）に語る」という形式になっているのは、このあたりの事情を反映している。

初期仏典も「私（＝アーナンダ）は次のように聞きました（漢訳で「如是我聞」）」というフレーズで始まっているが、ジャイナ教の場合は上述のような事情によるものであり、仏教の場合は後述する仏典結集（けつじゅう）に至る経緯を反映したものと考えられるため、その背景は異なっている。

聖典の編纂

その後、ジャンブーも一切知を獲得して涅槃（ねはん）に入り、現在の時間周期で最後の解脱者となった。そして彼から数えて四代目のバドラバーフの時（紀元前三百年頃）に、マガダ地方で飢饉が発生し、古い教えの多くが失われてしまった。また、バドラバーフ率いる教団の一部は難を避けて南へ移住したのだが、十二年後に彼らが戻ってくると、不在の間に、ストゥーラバドラ主導のもとパータリプトラで新しく聖典が編纂されていた。結果として、これがジャイナ教聖典の第一結集となる。結集というのは、現代風に言えば編纂会議であり、正しい教えを残すために出家修行者たちが集まり、教えを唱えて確認し合う行事である。このような聖典の編纂に加え、衣の着用が習慣化していたのを容認できない者たちが離脱し、白衣派と空衣派が分裂したという伝承もある。

第二結集は、紀元三百年頃にスカンディラの指導によりインド北部のマトゥラーで行われ、ほぼ同時に、ナーガールジュナの指導によりインド西部のヴァラビーでも行われた。この二つの結集の相違を解決するため、四百五十三（もしくは四百六十六）年、ヴァラビーの地でデーヴァルッディの指導により最後となる第三結集が行われた。現在、インド西部が白衣派の中心地となっているが、これは結集の行われた都市が徐々に西へ移動していることとも繋がっている。

仏教の第一結集はブッダの入滅直後のことで、マハーカーシュヤパ主導のもとラージャグリハで行われた。その際、ブッダに常

鈴木大拙
没後50年 未発表論攷
第2弾 発売中！
東西霊性文庫❽小林圓照監修

妙好人、浅原才市を読み解く〈英文対訳〉
「他力は自己の外ではなく内にある」阿弥陀、そして浄土の真髄を解き明かす

I 〈才市の自由詩〉
才市は煩悩・邪慳のあさましい自身を省察して、前頭に二本の角の生えた鬼と呼ぶ

II 〈阿弥陀と罪の意識〉
鬼となる自己を責めながら、弥陀と共にある喜びをかみしめる矛盾

III 才市の罪の考え方
罪とは世界そのものの基礎であり、全宇宙（法界）の果てまで広がっている

IV 罪、個人的と集団的
「戦争の罪」の悪魔的なあり方を批判

V 才市と和解
弥陀による無償の贈与であり、「和解」ではなく「報謝」の思いのままでよい

付▼鈴木大拙略年譜
鈴木大拙主要著作一覧

B6判
1,250円＋税

東西霊性文庫❼ 鈴木大拙
無量光・名号
〈英文対訳〉 B6・1,480円＋税

図書出版 ノンブル社
東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2F
Tel.03-3203-3357 Fax.03-3203-2156
http://www.nonburusha.co.jp/

に仕えていたアーナンダが経（ブッダの言葉）を、戒律に理解の深かったウパーリが律（教団における共同生活の規則）を唱えて承認され、経蔵と律蔵の原型ができあがった。さらに仏滅から百年が経過した頃、戒律に違反する十種の事柄を行っている修行者がいたため、ヤシャスがヴァイシャーリーに七百人を集めて審議した。その審議の後で仏典結集を行ったとする伝承もあるため、この一連の出来事を指して第二結集と呼んでいる。それ以降の結集に関する伝承もあるが、インドの仏教教団全体による結集に限定するならば、多くの部派が共通して伝えているこの二つのみが、何らかの史実に基づいていると考えられる。

修行者たちが一堂に会し、教えを確認し合って正典化する結集は、ジャイナ教や仏教のように特定の人物を開祖とし、その教えを口承で伝えてきた宗教に特徴的なものである。バラモン教のヴェーダのように永遠で、作者がいないとされる聖典の場合は、そもそも結集を行う必要がない。また、特定の人物に帰せられる『マヌ法典』などでも、その人物の歴史的な実在が定かでないため、結集が行われたという話は聞かない。

聖典の分類

ジャイナ教の白衣派聖典は、大きくアンガ（「身体」という意味）とアンガ外の二つに分けられる。それ以前の古い教えは失われてしまったが、その一部はアンガに組み入れられているという。アンガは文字通り聖典の身体であり、最も重要な十一の聖典を含んでいる。

アンガ外は後代の長老たちが説いたものなど種々雑多なものも含んでおり、ウパーンガ（副次的なアンガ）、チェーダ・スートラ（罰則に関する経）、ムーラ・スートラ（根本的な経）、プラキールナカ・スートラ（雑多な経）、チューリカー・スートラ（補遺の経）の五つに分かれる。

ウパーンガは十二の聖典を含み、多くは在家信者に説かれた物語である。チェーダ・スートラは教団における共同生活の規則を記したもので、六つの文献を含む。ムーラ・スートラは、出家生活の最初に学ぶべき四つの文献を含む。プラキールナカ・スートラは十種の短い文献から成り、儀礼で用いる賛歌や断食死に関する文献を含む。チューリカー・スートラは二つの文献から成り、二人の長老に帰せられる。この二つの文献は他の聖典の内容の要約を含んでいるため、資料として非常に貴重なものである。

初期仏典は、経、律、論（経に関する研究）を合わせた「三蔵」から構成されており、整然としている。それと比べると、ジャイナ教聖典は、律がチェーダ・スートラに含まれる他はやや雑然としており、経と論の区分に関しても仏教ほど明確ではないように思われる。

また、白衣派内部にはいくつかの支派があり、各派で認める聖典の数が異なる。一方、空衣派は古い教えが失われてしまったと考えるため、そもそも白衣派聖典の権威を認めない。しかし空衣派にも、失われた古い教えの内容を伝える文献があり、それらは聖典と同様の地位を占めてきた。また、彼らは他にも、後代の学僧たちの著作を代用聖典として扱ってきた。

仏教の場合には、後に大乗仏教という新たな展開が生じ、多くの大乗経典が生みだされたが、ジャイナ教においてはそのような大きな展開は見られなかった。

聖典の言語

昔のインドの文章語はサンスクリット語とプラークリット語に大きく分かれる。前者は、「完成、洗練された言語」という意味で、上位階級のバラモンを中心に用いられた。そのため、インドの主流派文化では、サンスクリット語で書物が著された。一方、後者は、「素のままの、自然の言語」という意味で、地域ごとに少しずつ異なった特徴を持っていた。

ジャイナ教聖典の言語は、半マガダ語というプラークリット語の一種である。その名前は、マハーヴィーラやブッダが活躍したマガダ地方の言葉に近いことに由来する。

一方、初期仏典の言語も、パーリ語というプラークリット語の一種である。こちらは、アショーカ王が各地の言葉で刻んだ法勅と比較した結果、インド西部の方言に近いことがわかっている。

ただし、初期仏典にも東部方言の特徴が見られるため、最初はジャイナ教聖典と同じくマガダ地方の言葉だったのが、西部の言葉に移されたものと考えられている。

共通する詩句の存在

ジャイナ教聖典と初期仏典には、しばしば非常に似通ったフレーズが見られる。一例を挙げると、ジャイナ教聖典『ウッタラッジャーヤー』九・三四には「勝利しがたい戦闘において百万の敵に打ち勝つ者にとっても、一つの自己を克服することが最高の勝利である」とあり、初期仏典『ダンマパダ』一〇三には「戦場に於て百萬人に勝つとも、一の自己に克つ者こそ實に最上の戦勝者なれ」（中村元訳）とあって、非常によく似ている。

このような類似は、詩節全体が似ているものから一部だけが似ているものまで様々であるが、どちらか一方が他方へ影響を与えたというよりは、両者の母胎となった沙門（しゃもん）宗教の中で広く共有されていたことによるものと思われる。

これまでにも両宗教の聖典を並行して学んだ研究者たちにより大きな成果があげられており、仏教の文脈で分からなくなった詩節の意味が、ジャイナ教聖典を参照することで明らかになった例も多い。そのため、初期仏典を正しく理解するにはジャイナ教聖典に関する知識が必須であると言える。

第五回では、ジャイナ教徒が目指すものとそれに到る手段やプロセスに注目して、ジャイナ教の修行論、解脱論について紹介したい。

ほった・かずよし▼大谷大学真宗総合研究所特別研究員。ジャイナ教。

ISSN 1343-6198
平成28年5月25日発行
毎月1回25日発行
No.579

春秋 Shunjū

2016
6

新連載 中村元——熱情と思惟(1) 若松英輔 1

近代日本、ブルース事始め カロリン・ボワシエ 5

かわたれの調べ——これからの「現代の音楽」へ寄せて 大久保賢 9

新連載 ケアリング人智学の試み 1 飯塚立人 12

新連載 世界宗教におけるキリスト教の位置(1)
——死によって実現しなかったオックスフォード大学での講演原稿
エルンスト・トレルチ／深井智朗 訳 16

孔子死後の儒家における生命
〈いのち〉でたどる東洋思想 3 小倉紀蔵 20

ジャイナ教はどのように伝承されたのか?
——聖典の伝承と結集 ジャイナ教と仏教 4 堀田和義 24

二つの顔をもつオルガン 日本オルガン小史 9 馬淵久夫 28

京都十景 4 京料理の眼目は魚 鳥居本幸代

春秋社